

そ の と き

東日本大震災ドキュメント

防災危機管理課 224-5554

平成23年3月11日、午後2時46分ごろ、かつて経験したことのない、激しく長い揺れ。国内観測史上最大のM9.0という巨大地震は、大津波を引き起こし、原子力発電所の事故まで招きました。一万五千人以上の方が亡くなり、十一万戸以上の家屋が全壊した原因のひとつは、津波でした。そして四か月以上が経過した今なお、約五千人が行方不明、九万人以上が不便な避難所での生活を余儀なくされています。

川越では震度5弱の揺れを観測した今回の地震。大きな被害はありませんでした。しかし、地震後の交通機関の乱れなどによる帰宅困難者の発生、ガソリン・生鮮食料品などの不足、原発事故に伴う計画停電など、市民生活にさまざまな影響がもたらされました。

帰宅困難者となりながらも子どもを迎えに行こうとした両親、被災地から川越に避難してきた皆さん、震災直後に被災地へ救助活動に向かった消防士……。それぞれが直面した今回の震災。そのとき、何を考え、どう行動したのか。そして明日来るかもしれない地震に備えるために、私たちにできることは何か、考えてみませんか。

陸前高田市の被災状況(3月18日撮影) 写真提供：川越地区消防組合



翌朝4時、「やっと会えた」 〜帰宅困難者の長い一日〜

地震発生直後、不通となった電車。帰宅困難者が多数発生。都内に勤める関谷夫妻も帰ることが難しくなりました。気がかりなのは、保育園にいる子ども。行きたくても行けない親、帰りたくても帰れない子ども。共に長い一日の始まりでした。



「先生がいたから怖くなかった」と智香ちゃん。「本もたくさん読めたしね」と池田園長。

落ちていて対応した保育園

地震発生時、昼寝が終わろうとしていた新宿町保育園。とつさに布団をかぶせて子どもたちを守りました。「その後全員を一階に下ろし、本棚などが倒れな



「体が対応を覚えていた」池田園長(右) 岡部副園長(左)

いようにして教室の中央に園児が固まりました。歌を歌って、地震の恐怖を忘れさせようとしていましたね」と、当時副園長の岡部早苗さん。市役所にいた園長の池田美智子さんが戻ったときには「子どもたちは遊びながらも、保育士の話には静かに耳を傾けていました。冷静に行動できてよかったです」。

身重の体、でも保育園の子どもが心配

都内で仕事をしている関谷周之さん・佐智子さん夫妻。同保育園に智香ちゃんを預けていました。「地震発生後すぐに保育園と夫に連絡したけど、なかなかつながらなくて」と5月に出産を控えていた佐智子さん。歩いて帰ろうとすると周囲に止められました。「自分が妊婦ということを忘れていました。とにかく子どもが心配で」。その後同僚の家族の車で帰ることになり、周之さんに伝えることもできませんでした。そこで無理に動く危険と判断し、会社に残った周之さん。「今思えば、歩いて帰ればよかったです」。

大渋滞の都内。佐智子さんの職場に迎えが



震災を機に自治会にも積極的に参加するようになったという関谷さん

来たのは午後10時ごろでした。そこから飲まず食わずで六時間。ようやく保育園に着いたのは午前4時でした。「ラジオを聞いては選択を間違えた、と何度も思いましたね。でも実際は車がなければ無事に帰れなかった」。

つながりを見つめ直す機会に

保育園では「鍋でご飯を炊いて、おにぎりだけの夕食。でも満腹になって不安な顔がやわらぎましたね」と池田園長。「必ず迎えに来るから大丈夫」と言い聞かせ、智香ちゃんが寝付いたのは日付が変わるころでした。智香ちゃんが寝たあとも、園長と副園長は風の音で玄関を見に行くほど緊張した時間を過ごします。到着するまで「絶対に泣いている」と思っていた佐智子さん。駆け寄り抱きしめた智香ちゃんは、平気な顔で「早く帰ろう」と言ったそうです。その後無事に男の子を出産した佐智子さんは「車の中で『保育園は安心』と信じていました。それは智香に会って確信になりました」。

「最近、園内の親同士や近所とのつながりが強くなったみたい」と池田園長。子育てには多くの助けが必要。震災は、多くの人がそれを改めて認識する機会になったようです。

これからの暮らしをどう描けばいいのか……



左から岡村さん、菅野さん、渡邊参事、藤田さん。震災による避難、原子力発電所事故による避難を繰り返し、原発から離れた川越に避難してきました。6月24日、現在に至るまでの苦難と深い悲しみを、涙と笑顔を交えながら語ってくれました。

3月24日、農業ふれあいセンターに開設された一時避難所は、延べ十一世帯・三十二人を受け入れ、4月30日に閉鎖。川越で避難生活を送った皆さんと、運営に携わった市職員が集まり、「そのとき」を振り返りました。

スケート場にいるかのように

震災当日、事務所の仕事をしていたという岡村幸誠さん（55歳・富岡町）。「事務机がスケート場にあるかのように動き出した。事務員を連れてなんとか外に出ました」。

藤田美也子さん（55歳・大熊町）は、隣町の美容室から帰ろうとしたときに地震が起こりました。「土地勘がなく、どこに逃げれば良いか分からなくて大変でした。たまたま知り合いに会えたので帰れましたが、いつもは三十分かからないのに、家に着いたのは三時間以上経過してからでした」。

薬品会社で勤務中だった菅野和幸さん（30歳・富岡町）は、休憩中に地震が発生。「会社の防災体制に従って電源を落としたりバルブを閉めたりしました」。作業を終えて二回目の地震までに高台に避難。直後に津波が襲ってきて、菅野さんの隣の会社は津波にのまれてしまったそうです。段をなして次々とくる津波。見ていることしかできませんでした。午後5時過ぎ、家に帰った菅野さん。家族の安全を確認し、車に必要な最小限のものを入れ



「日替わりで避難所のボランティアをする体制ができた川越はすごいと思う」と岡村さん

れたことも知りました」。活動をいったん終えて本部に戻ったとき、福島第一原子力発電所で水素爆発が発生。「五十件ほどの家を全て回って、避難できないお年寄りなどを保護し、川内村に向けて避難を始めたのは午後5時過ぎでした」。さらに3月14日には郡山市へ。そこでも消防団の活動をした菅野さん。家族のもとに帰ったのは25日でした。「避難所には格差がありました。物資を必要とするのに必要なだけ配布するのは難しい」。

マイクロバスを借りて川越へ

3月11日は近くの集会場、12日には田村市へ避難した藤田さん。「すぐに帰れると思っていたので、持ち出したものは毛布ぐらい。田村市では小学校のランクルームに百六人が避難し、ほとんど飲まず食わず。のどの渇きや空腹感より恐怖と寒さでいっぱいでした」。



伊佐沼公園で遊んだあとの笑顔・笑顔・笑顔

たくさんの善意が集まりました

～ 避難者への支援 ～

4月1日、南古谷地区の親子13人が避難所となっている農業ふれあいセンターを訪れました。子どもたちはちょうど春休み。何かできれば、との思いから総勢50人ほどで作ったクッキーを避難してきた皆さんに手渡しました。「長い避難生活で心も体も疲れている。少しでもほっとするようなものを、と考えて作りました」と村上美貴子さん。その後、子どもたちは避難してきた子どもたちと一緒に伊佐沼公園へ。時間がたつにつれ、増えていく笑顔。別れるころには、まるできょうだいのように遊んでいました。

このほかにも、自治会連合会・女性団体連絡協議会・NPO法人・美容組合・商工会議所女性会・食生活改善推進員協議会・市内社会福祉法人・埼玉県医師会・埼玉弁護士会川越支部など多くの団体・個人が、炊き出し・食事提供・相談など、避難した方に対して支援を行いました。ご協力ありがとうございました。



手づくりのクッキーを避難者に手渡す子どもたち

13日に田村市の避難所で合流した岡村さんと藤田さん。川越に住む藤田さんの弟を頼って川越に向けて出発するため、ほかの同行者も募りマイクロバスを借りました。16日の昼過ぎに出発。川越に着いたのは真夜中でした。弟が迎えに来るまでの間、コンビニの駐車場に車を止めていると「店員が店の商品を自腹で購入し、食べ物と飲み物を提供してくれました。その気持ちが、嬉しくて」。

農業ふれあいセンターでの避難生活

3月24日、「農業ふれあいセンター」に市の避難所が開設。「原発から逃れることができなくてほっとした」というのが皆さんの正直な気持ちです。「今までいたところは雲泥の差。本当にありがたかった」と岡村さん。「シャワーを浴びることができて嬉しかった」と藤田さん。岡村さんは「最初から仕切りがあればプライバシーの確保ができてよかった」。



「ボランティアは支える人たち。避難者のことを考えて活動することが必要」と渡邊参事

きただけ被災した皆さんの気持ちに寄り添うような心がけました。連日手づくりの食事を用意してくれるなど、市民の皆さんのさまざまな支援が大きくなりました。避難してきた皆さん同士の交流も生まれました。「意外と近い人が多かったのでもよかったです」と菅野さん。受け入れるには、ある程度の地域性も考慮したほうが良いのかもしれませんが。「他人の子どもも自分の子ども

他県から被災者を受け入れるのは市も初めて。十分な対応ができなかったり、職員にも戸惑いがあったりしました。避難所開設に携わった渡邊久美子参事は「で

ような気がする」と菅野さん。一緒に過ごせば、家族になれる。そんな団結力と強さが福島の方々の県民性なのかもしれません。**前に進むために**
奥さんと実家がある北海道に転居するという岡村さん。「何もなければ福島に戻りたい。でも、何年かかるか分からないのを待つことはできない」。菅野さんは家族を川越に残して、二年間石川県の工場へ。「全工場の従業員の再就職先を見つけようと、同じ工業団地の営業担当者が全国を回ってくれました」。二年後、再び選択を迫られます。岡村さんの子どもと藤田さんは川越に残ることに。藤田さんは「近所の人の優しさに感謝しています」。藤田さんが一時帰宅したとき、福島の家は震災前とほとんど同じ姿でした。まるで家族の帰りを待っているかのよう。「でもなんで、家族がバラバラになっちゃうんだろう」。

震災後もまもなく被災地で救援活動などを始めた消防士・保健師・ボランティア。放射線や余震の恐怖と戦いながら、それぞれの活動現場で何を見て、何を感じたのでしょうか。

恩返しをしたかったから



五人の仲間と支援活動を行った高山ユキさん。3月28日から一週間、主に埼玉川越総合地方卸売市

場で買い求めた野菜・粉ミルク・水などの食料を使って、避難所や被災した住宅に住む高齢者への食糧支援を行いました。「テレビで流れる映像を見て、何かできないかと考えていました。そこで得意な料理で手助けしようと思い、参加しました」と高山さん。行き先はいわき市。事故を起こした福島第一原子力発電所からおよそ五十kmしか離れていません。放射性物質の影響を考えると最初は不安でいっぱいでした。それでもボランティアに参加したのは「恩返しをしたかった」からです。

高山さんは三十年前、ベトナムから難民として日本にきました。戦争によって住む国を追われ、やっとたどり着いた日本。着の身着のままでも持つていかなかったそうです。「住む場所を提供してくれたり、日本語を教えてくれたりして、日本で生活できるようにしてくれました。今の生活があるのはそのおかげです」。その後結婚し、子どもが生まれたのを機に川越に引っ越しました。恩を返したいという気持ちは持ち続けていましたが、阪神・淡路大震災の際は子どもが小さかったこともあり断念。今回は会社が計画停電で休みになり、子どもも高校生以上に成長。更に夫の理解もあつて、ボランティアをすることができました。いわき市に着いて活動を始めたものの、始めは受け入れてもらえないこともありました。「間に合ってるから大丈夫と言われました。それでも時間をかけてじっくり話している

日ごろから地域に根付いた活動を

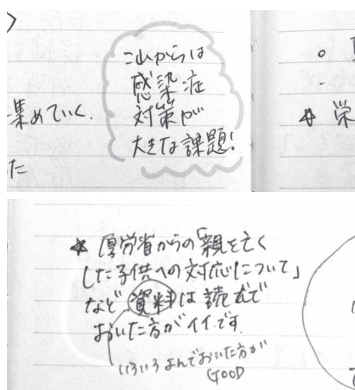


4月7日から石巻市内で活動を始めた有馬理恵主査。平成7年の阪神・淡路大震災、同16年の新潟県

中越地震でも活動経験があります。それでも、現地入りして「今までとは規模が違いすぎる」と実感しました。加えてその日の午後11時32分、震度6の余震。慣れない地での停電と津波警報による避難を余儀なくされ、眠れない一夜を過ごしました。被災地での主な活動は戸別訪問。復旧し始めたばかりの被災地を再び



戸別訪問の様子
「聞いてもらえてよかった」の声が活動の励みになる



保健師たちの連絡ノート

「皆さんの本当の心の声を聞いているか心配でした。十分頑張っているのに『みんな大変だから頑張らなきゃ。前を向いていかなきゃ』って、みんな言うんです」と有馬主査。「互いに支え合う」という意識が強い被災地。そこでの活動は、支援にきた人も含めて全員で支え合おうとしていくように感じられたそうです。「地域とのつながりがいかに大切かを思い知らされました。地域に根付いた活動を大切にする『頼れる保健師』でありたいと思います」。



現場で役立つ懐中電灯は今も持ち歩いている

襲った余震に、落胆の表情を見せる人も多かったそうです。一方で、津波で一階部分が水没したのに「家がいい」と残る人も。



3月11日、午後9時13分。消防庁長官から緊急消防援助隊の出動要請。川越中央消防署の高度救助隊（*）・関根康浩隊長は、震災後

川越が被災したときの備えを

すぐに準備を始めました。午後10時に出発したものの、岩手県消防隊と合流し陸前高田市に入るまでに二十時間。「重い消防車は燃費が悪く、給油が不可欠。震災の影響で停電し、給油ポンプが動きません。手で動かしたため給油に時間がかかりました」と関根隊長。陸前高田市に入り、山を越え、川沿いに下り始めると景色が一変。あまりの被害の

と『野菜が欲しい』と言ってくれて。でも余分に置こうとすると『ほかにも待っている人がいるから』と受け取りませんでした」と高山さん。日本人の持つ、他人への思いやりに胸を打たれました。避難所だけでなく、被災した住宅に住む高齢者にも支援しました。前日に弁当が必要な家を確認し、夜に仕込みをして翌日の昼までに配達。多いときは二十個以上作りました。「みんなすぐ喜んでくれて、嬉しかったです」。

自分のできる範囲で何ができるのか考え、将来より今を心配し、何よりも恩返しをしたい気持ちだが、今回のボランティアになりました。高山さんは「一人ひとりができる範囲で



いまだに大きな船が残る気仙沼市内 (7月24日撮影)



感覚を研ぎ澄まして行う救助活動の様子 川越地区消防組合提供

***高度救助隊とは？**
人命の救助に関する専門的かつ高度な教育を受けた隊員五人以上で編成され、特殊な救助器具を装備している。県内で高度救助隊があるのは川越だけ。さらに高度な救助器具を装備した特別高度救助隊がさいたま市にある。どちらも埼玉県特別機動援助隊「埼玉SMART」に属している。県内災害時には最前線で迅速な救助活動を行う。

大きさに言葉を失いました。

13日、午前7時から生存者の捜索を開始。「津波で流されてどこが道路でどこが家だったのかも分からない現場では、なかなか見当がつかず、捜索は難航しました」。埼玉県隊と各県から来ている精鋭たちが五十人がかりで一日中捜索しても、発見できたのは二人の遺体。それでも住民の皆さんから感謝されたそうです。「期待されている以上、頑張らなければ」。その気持ちに困難な作業に立ち向かう原動力になりました。

「起こってしまった災

害は、人の力で乗り越えるしかない。そのためには災害に負けないだけの人数と力を集める必要がある」。被災地を見て全国民をあげての総力戦に



捜索活動の際に役立った「ポーカメ」先端に付いているカメラでガレキの中を見ることができます

なると実感したそうです。また、災害は大規模であればあるほど、個々の備えが重要になってきます。災害を想定した生活を考える必要があると関根隊長は話します。「川越が被災した場合の備えは重要ですが、それ以上に受け入れ態勢を整えられるかが問題です。さまざまなところから差し伸べられる支援の手を、できるだけ早く、いかに効率よく幅広く受け入れることができるか。そのための体制を作っておく必要があると思います」。

東日本大震災 市の主な対応

3月11日 帰宅困難者用避難所を開設(中央小学校・仙波小学校・高階小学校・富士見中学校・川越工業高校)。
避難者合計六百十八人。

3月11日～5月4日

岩手県・福島県に緊急消防援助隊を派遣。第一次から第七次まで合計百十四人。

3月12日～14日

稲敷市へ給水車一台・職員四人を派遣。

3月14日～4月8日

計画停電対応のため電話機を特設し、二十四時間体制で問い合わせに対応。

3月16日～

市長を本部長とした緊急危機管理対策本部を設置。

3月22日～4月19日

宮城県・福島県に保健師などを派遣。合計四十四人。

3月24日～4月10日

市民の皆さんから避難者への支援物資を受け入れ。宮城県や福島県の避難所にも提供。

3月24日～4月30日

農業ふれあいセンターに被災者の一時避難所開設。延べ十一世帯・三十二人利用。

3月29日

中核市(盛岡市・郡山市・いわき市)へ各百万円の見舞金を送る。

3月31日

中核市(いわき市)へ乾パンなど一万二千食を提供。

5月24日～6月9日

東松島市に保健師などを派遣。合計二十人。

7月1日～27日

東松島市に保健師などを派遣。合計二十人。市内に避難してきた方へ生活支援金の支給・家賃の一部補助などを実施。

8月8日

友好都市・棚倉町へ百万円の見舞金を送る。

被災者に民間賃貸住宅を提供

県では民間賃貸住宅を借り上げて、東日本大震災の避難者を対象に、応急仮設住宅として提供しています。入居希望者の募集は、8月31日(水)までです。

申し込み方法など詳しくは、県住宅課 ☎048・830・5562 にお尋ねください。

防災の知識・技術・行動力を身に付ける

「埼玉県防災学習センター」は、消火体験・暴風雨体験・地震体験などができる施設。自分と大切な人を守るために、災害時の行動を学んでみませんか。入館は無料です。

●利用案内

所在地：鴻巣市袋三〇(北鴻巣駅徒歩二十分)

☎048・549・2313

開館時間：午前9時～午後4時30分

(入館は午後4時まで)

休館日：月曜日(祝日の場合は翌日)

年末年始など



写真提供：川越地区消防組合

起こりうる「そのとき」のために

阪神・淡路大震災の際、神戸市や芦屋市の被災者は人口の15%から17%でした。川越市の人口の17%は、約五万七千人。一日分の食糧は、十七万一千食必要です。市内の防災備蓄庫などにある非常食は約二十万食。一日分（三食分）の備蓄はあります。

大地震などの災害が発生した場合、市や消防は全力をあげて救助・救援活動を行います。しかし、道路・橋梁の損壊、水道管の破裂、停電などにより活動が制限されることも考えられます。備蓄してある非常食を必要とところに配れなくなることも。だからこそ、一人ひとりの備えが重要です。

そこでお薦めしたいのが、日常生活で消費している食品を備蓄に利用する「ランニングストック」という方法です。普段から食べている食品をある程度多めに確保し、賞味期限の近いものから消費。消費の直前または消費した直後に新しいものを補充していく方法です。非常用食品として特別に用意されたものでなくても、食べ慣れた食品を備蓄に利用す

ることができません。アレルギーがある方や乳幼児など、食べられるものが限られる方に特に有効な方法です。

また、災害時は携帯電話がつながりにくく、情報伝達も難しくなります。家族の役割分担や連絡が取れない場合の集合場所をあらかじめ決めておくことも大切です。

今回の大震災に対して、市ではできるだけ迅速かつ確実な対応に努めました。その活動の中で見えた課題も多くあります。その一つに防災行政無線の問題があります。防災行政無線は、市内二百八十四か所に拡声子局（スピーカー）を設置し、大規模地震などの災害情報を市民の皆さんへ発信するためのものです。しかし、気象条件や周辺環境に影響されやすいため、地域によっては聞き取りにくい場合があります。今回の計画停電の案内では、内容が聞き取れないなどの指摘を多くいただきました。市ではスピーカーを三つのグループに分け、時間差で放送するなどの工夫をし

ています。また、耳の不自由な方や防災行政無線を聞き取りにくい方のために、携帯電話などへのメール配信サービスを実施しています。さらに、防災行政無線を聞き逃したり聞き取れなかったりした方のために、テレホンサービス ☎229-3450 を始めました。

東日本大震災は「自然の猛威を止めることはできない」ということを改めて感じた出来事でした。川越は津波とは無縁。とはいえ巨大地震は起こりうる災害です。そのとき、どう考え、どう行動するのか。大きな災害であればあるほど、一つひとつの対応が生死を分けることにもなります。

被災地の皆さんは、復興に向けて少しずつ、確実に歩み始めました。私たちには、それを助ける息の長い支援が求められています。同時に、自分自身が災害に備えることも大切です。一人ひとりができることを、できる範囲で実践しましょう。被災地のために、そして明日来るかもしれない「そのとき」のために。